

音楽の散歩道 その5

## — ジャズは世につれ、アメリカの歴史とジャズ —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章  
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志  
 | 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

**はじめに**

私が兄から初めてジャズを聴かせてもらったのは、今から63年前、1960年の小学生の時である。

曲はキャノンボール・アダレイ・クインテット演奏「Them Dirty Blues」の第1曲目、弟ナットの「Work Song」であった。

独特のリズム、印象的なサクソとコルネットのメロディ、それに労働者の力強いエネルギーを象徴する、単調に振り下されるドラムの一撃が記憶に刻み込まれた。

ドラムは労働者のハンマーの音である。

キャノンボールが、マイルスのセクステットを離れた後のLPで、時代はファンキー〜ソウル・ジャズの時代に入っていた。

私にとって記念すべき、このLPを兄は自分のサインを入れて私にくれた。

私の宝物である（図1）。



図1 63年前に初めて聴いたジャズ「Work Song」

ジャズは米国に於て、政治的、社会的、経済的な独特の要因が、歴史の流れの中で絡み合い、発祥・発展したものである。

その根底には、アフリカン・アメリカンの米国での歴史と、彼らの特異な音楽センスが、一貫して強く関与している。

また、「King of Swing」と呼ばれた、ベニー・グッドマンの平等の精神に則った勇氣ある行動も看過す事はできない。

ここでは、社会的・経済的背景としてのローリング・トゥウェンティーズと、ジャズ発展の歴史的・政治的背景を考察し、ベニー・グッドマンの功績とライオネル・ハンプトンの不巧の名演「スター・ダスト」までを主に述べる。

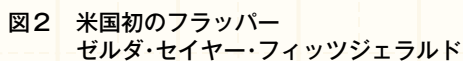
即ち、ニューオーリンズ〜スウィング・ジャズまでで、その後のビバップ（bebop）〜モダン・ジャズに関しては、機会があれば言及したい。

### 〔1〕ローリング・トゥウェンティーズ 狂乱・狂騒の20年代 ジャズ発展の社会的背景

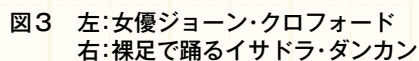
偉大なる発明王エジソンは、1877年に電話器、蓄音機を、79年に電球、80年に発電機、改良型映写機を発明し、社会・生活環境を一変させた（テクノロジー時代の到来）。

99年、エジソン照明会社で技術力を養い、退職したフォードは、1903年に設立した自動車会社で、世界記録147.5km/hを樹立。08年、T型フォードでライン式生産方式を

ハリウッド女優で、チャールストンの名手



イカールは、1920年に理想の女性、ファニー





・ヴォルメールと結婚。彼女をモデルに20年代の女性を多く画き、好評を得た。

図4上は、23年の「モーターカー」で、オー



図4 上:「モーターカー,1923年」  
下:「ピクニック,1929年」

ブンカーを運転する長いスカーフの女性と愛犬ダラーが、20年代をよく表している。

図4下は、29年の「ピクニック（部分）」で上流社会の生活の一端がうかがえる。

20年代は正に「Golden Twenties」であった。

古代風の衣装をまとい、革新的で自由な動きと自由な感情表現、そして誰もが想像だにしなかった素足で踊るダンサー、“床を見出したダンサー”“裸足のイサドラ”と称された、モダン・ダンスの創始者・イサドラ・ダンカンが、オープン・カーの助手席で、首に巻いた長いスカーフが、風になびき車輪からみついて死んだのは、27年であった（図3右）（図4上）。

ココ・シャネルが、動き易いジャージー生地、ファッションに革命を起したのは、15年、シャネル No.5 を発売したのは、21年の事である。

皆、20年代に社会進出し、その時代の先頭を走った女性であった。

## 〔2〕 Boston Tea Party と米独立戦争 南北戦争と奴隷解放

18世紀中期の英仏植民地戦争、七年戦争等に勝利した英国は、戦時国債償還のため、植民地に増税を課した。

1773年、英本国の茶法、Tea Act に反対し、Boston Tea Party、ボストン茶隊事件が起った（図5上）。

これを契機に、74年、独立戦争が勃発。植民地側は、パトリック・ヘンリーの“代表なくして課税なし（図5下、赤下線）”を正当性の根拠として結束した。

彼の75年の演説“*but as for me, give me liberty or give me death*”は名言。

76年、トーマス・ジェファースン起草の独立宣言、83年のパリ条約で、植民地側は英本国からの独立を勝ち取った。



It was an act of protest in which a group of 60 American colonists threw 342 chests of tea into Boston Harbor to agitate against both a tax on tea (which had been an example of taxation without representation) and the perceived monopoly of the East India Company.

図5 「Boston Tea Party」  
インディアンに変装した一団

〔参考〕 ボストン茶隊事件が正しい訳語

日本では「Boston Tea Party」は未だに「ボストン茶会事件」と訳される。誤訳である。日本人は Tea Party = お茶会 のイメージしか思い浮かばないのだろう。

Party には、大まかに3つの意味がある。

- ①お茶会のように、楽しむ為の宴会や集まり。  
いわゆるパーティーである。
- ②政治上の党、政党など
- ③ group of people participating in an activity  
あるいは a band of people associated temporarily in some activity.

Boston Tea Party は明らかに③の意味なので、ここでは「隊」と訳さねばならない(例: 登山隊 climbing party)。

なぜ、このような誤訳が続いているのか！それは日本人は最初に翻訳されたものしか頭に入らないからだ。自分自身で英文を確認しないからである。

日本語訳で解釈するので、ボストン港に茶箱を投げこみ、港を茶碗に見立て、ジョークで紅茶パーティ(お茶会)と表現したなどと、奇想天外な解釈も飛び出す事になるのだ。

英文(図5)をみれば一目瞭然である。

これは、インディアンに変装した決死の団が、東インド会社の船に殴り込みをかけ、茶箱を不法投棄した煽動行為を指しており、戦争に発展した歴史的な重大事件であり、ジョークが入り込む余地など全く無い。誤訳は1日も早く訂正すべきである(博志)。

独立宣言から85年後の1861年に勃発した南北戦争は、65年、北軍の勝利で終結。

リンカーンの暗殺後、奴隷解放宣言は憲法修正第13条として可決された。

然し実質的な平等は、1964年の公民権法、Civil Rights Actの成立まで続く。

### 〔3〕ジャズの発祥と発展

教会での霊歌しか許されなかったアフリカン・アメリカンは、奴隷解放宣言により、自分達の境遇や喜怒哀楽などを歌にしたブルース(blues, 憂うつ。Blue note scale, 第3・7音目を半音下げた blues 用の音階)、労働歌、ゴスペル音楽などが広く歌われるようになった。

これに、南北戦争後の軍放出の楽器によるブラスバンドのマーチやラグタイムなどが融合して、ジャズが発生したと言われる。

シンコペーションを多用したラグタイムは、20世紀初頭のスコット・ジョプリンの時代に頂点に達する。彼の曲を聴くとバロックの対位法の名残りが色濃く認められる上、後のホンキー・トックと異なり、演奏も端正で、彼が、良識と知性豊かな音楽家で、正統な音楽教育を受けた事が分る(図6)。



図6 ピアノ・ロールに遺された、スコット・ジョプリンのラグ・タイム

彼自身の演奏を、1902～17年のピアノ・ロールで聴く事ができる。02年の「ズィ・エンターテイナー」は、73年の映画「ステイキング」で大ヒットした。

ジャズは、南部ニューオーリンズおよび南北戦争時の南部ディキシランドで発祥し、コルネット、トランペット、トロンボーン等を使用したバンドが演奏した、即興性を取り入れた新しい音楽である。

私のイメージは、陽気なルイ・アームストロングが、楽団と共に「聖者の行進」をトランペットで演奏しながら、ニューオーリンズの街を練り歩くというものである。

16年、ニューオーリンズ出身のシカゴの白人バンド「Stein's Dixieland Jazz Band」が「Jazz」の名称の初出と言われる。



20世紀初頭には、ニューオーリンズのジャズメン達は、狂騒の20年代で好景気に沸く、北部のシカゴやNYに拠点を移す。

ニューオーリンズ・ジャズを象徴するルイ・アームストロング(1901-71)の足跡を辿ると、23年にシカゴに移り、ミュート(弱音器)を初めて使用したコルネット奏者キング・オリバーの楽団で働いた後、24年には偉大なブルースの女帝ベッシー・スミスの「セントルイス・ブルース」の伴奏を務めた。26年には、「Heeibe Jeebies」でスキヤットを披露した。

64年には「ハロー・ドーリー」が大ヒットし69年のバーブラ・ストライサイドの同名の映画にも出演し、強い印象を残した。67年の「この素晴らしき世界」のヒットも記憶に新しい(図7)。

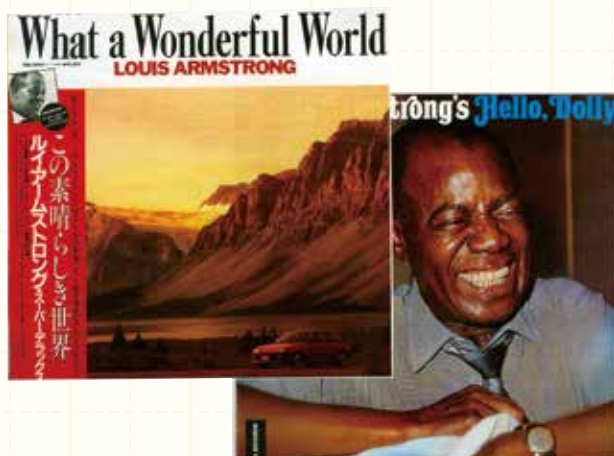


図7 ニューオーリンズ・ジャズのルイ・アームストロング

狂騒の20年代は、禁酒法で始まったが、社会進出の目覚ましい女性達の間に、チャールストンが大流行した。

禁酒法時代を通じ、NYのナイトクラブ、コットン・クラブでは、アフリカン・アメリカンのデューク・エリントン楽団(27年にバンド契約)等のジャズ・ライブが楽しめた。客は上流階級の白人に限定されていた。

26年には、NYにサボイ・ボールルームがオープンし、肌の色に関係なく、誰もがスウィング・ジャズや、スウィング・ダンス(チャー

ルストンを基にしたリンディ・ポップなど)を楽しんだ。

ダンスでは、その他、フォックストロット、ワルツ、タンゴの人気も高かったという。

20年代の楽団は全て、ニューオーリンズ・ティキシランド・ジャズの影響を受けており、そこからスウィング・ジャズが誕生したのである。

さて、シンフォニック・ジャズについて述べよう。海軍軍楽隊を経て20年にNYでビッグバンドを結成したポール・ホワイトマンは、24年、ジョージ・ガーシュインの「2台のピアノ用のラプソディ・イン・ブルー」(ブルーは、ブルー・ノートのこと)を、楽団専属編曲者グローフェ(後に「グラント・キャニオン組曲」などを作曲した米国を代表する作曲家)の編曲で初演。ポールは、これを「シンフォニック・ジャズ」と名付けた。

ジョージは、後に「パリのアメリカ人」や、全出演者がアフリカン・アメリカンのフォーク・オペラ「ポーギーとベス」を作曲した。

クラシックにジャズを取り入れた彼は、側頭葉てんかん(典型的な鉤回発作)で発症した、側頭葉膠芽腫による脳ヘルニア(テント切痕ヘルニア)で38歳の若さで死亡した。

#### 〔参考〕世界大恐慌

1929年10月24日(Black Thursday)に始まった米国の株価大暴落は、世界恐慌を引き起した。

大戦後、富を手中にした投資家は、豊富な資金を株式に投資。資金を得た企業は、工業・農業の大量生産を行った。やがて供給過剰“ものあまり”の状態となる。物が売れなくなると、資金回収に不安を覚えた資本家は、資金回収の為、株の売却に走った。預金者は、銀行に不安を感じ、預金引き出しに走り(取り付け騒ぎ)、連鎖的に企業倒産、労働者解雇の負のスパイラルに陥った。

自由競争こそが繁栄をもたらすという考え

の自由放任主義者フーバーが、モラトリアムを発令したのは、やっと1931年になってからであり、同年、英国では、マクドナルド挙国一致内閣が金本位制を中止、33年には、米国がブロック経済政策をとり、対外的には保護貿易主義となった。

世界恐慌は、長期的にはナチスに代表されるように第2次大戦につながる。

#### 〔4〕1930年代～40年代のジャズ ビッグ・バンドとスウィング・ジャズ

1929年の大恐慌による経済的ダメージは長く続いた。狂騒の20年代は終焉を迎えた。そのような状況下でも、ジャズやダンスは生きながらえ、更に音楽的にも洗練されてきた。

1933年には禁酒法が廃止されたが、これがジャズの飛躍につながった。アンダーグラ

ウンドな違法酒場（スピーク・イージー）などは合法化され、ホールにはビッグ・バンドが誕生し、飲酒、ダンスもよりポピュラーになり、ジャズもダンス音楽に特化していった。

ルイ・アームストロング、ポール・ホワイマン、キング・オリバー、ドーシー兄弟らの楽団を渡り歩いていたトップ・プレイヤーは、デューク・エリントン (P) が27年、ベニー・グッドマン (クラリネット) が32年、カウント・ベイシー (P) が35年、グレン・ミラー (トロンボーン) が37年に各々バンド・リーダーとなり、スウィング・ジャズの黄金時代が到来した (図8)。

ダンス音楽としてのスウィング・ジャズは、文字通り、ブランコが揺れるような、軽い足取りで歩くような、グルーブ感を持ち、上品かつしゃれたメロディの音楽で、ダンスに適したように1曲は3分前後で、イン・テンポ



図8 「ムーンライト・セレナーデ」のグレン・ミラー(第1曲目は「スター・ダスト」)



で演奏される。即興性は無く、楽譜に忠実に演奏する事が求められる。

## 〔5〕ベニー・グッドマンの勇気ある行動

個性あるスウィング楽団の中から、ここでは、ベニー・グッドマンを取り上げる。

1909年にシカゴで生まれ、クラリネット奏者となった彼は、32年にビッグ・バンド

を結成。後に「King of Swing」として大成功した。

彼の演奏技巧は卓越しており、クラシック分野でもボストン響などとも共演したし、作曲家バルトークやコーポランドから、協奏曲などを献呈されている。

図9左は、1937/38年の古いレコーディングのレコード箱である。図9右には、全メンバーの名前が記載されている。



図9 左:ベニー・グッドマン(1937/38)  
右:楽団メンバー(オーケストラ,トリオ,カルテット)

図10は、箱のふたを開けた所である。表紙裏の左上隅に、ベニーの小さいが貴重なサインがある。彼の謙虚で真面目な人柄がうかがえる。

この楽団メンバーをみると、オケのメンバーはベニー以下16名(ビッグ・バンド構成を示している)。そればかりではない。更にトリオ(三重奏)では、ベニー (cl), テディ・ウィルソン (P), ジーン・クルーパ (ds)。

カルテット(四重奏)では更にライオネル・ハンプトン (vib) が加わる。vibはヴァイブラフォンである。

なおトリオの結成は35年で、カルテットの結成は、ライオネルの入った36年である。

ここには、ジャズ史上、最も重要な事実が2つある。

①メンバーのテディ・ウィルソンとライオネル・ハンプトンはアフリカン・アメリカンであった。

保守的で人種差別が過激な時代に、白人バンドにアフリカン・アメリカンが加わり、



図10 レコード箱のベニーの小さいサイン(左上隅)

公衆の面前で演奏する事は、通常、有り得ない事、衝撃的な事であった。何が起ってもおかしくなかったのである。ベニーは、何物、何者も恐れず、ただ才能のみを重視して採用したのだ。

このトリオによるジャズ史上初のジャム・セッションは、35年に録音され、「Small Group Jazz」「chamber Jazz」と呼ばれている。翌36年のThe Congress Hotelでの演奏が、白人の聴衆の前でのテディのデビューと言われる(最初の民族混成編成のトリオ)。ベニーは、差別社会の米国で、民族の壁を打ち崩したのである。

また、三、四重奏、つまりビッグ・バン

ドの中の小編成バンド「band-in-a-band」は、次第に世に広まっていった。

- ② 1938, 39 年の歴史に残るカーネギー・ホールでの“Hot Swing Jazz”をフィーチャーした白熱の名演により、Jazz がクラシック音楽に負けない音楽である事が世の中、特に白人社会に認められたのである。

この演奏会には、エリントンとベイシーの楽団員の一部と、ベイシー自身 (P) も加わった。

図 11 は、ベニー・グッドマンの CD であるが、演奏日、演奏会場、演奏者、演奏時間の記載の無いものもあり、資料的価値はない。

例えば、右下の 10 枚組はデータがない。

大箱の 20 枚組は、全ての記載があり、全曲目の演奏者が確認できるので有用である。



図 11 ベニー・グッドマンの CD

図 12 のカーネギー・ホールの演奏でも演奏年 (38, 39 年) により、また曲により演奏者が、どんどん変わるのでデータの確認が欠かせない。ここでの演奏は、ルーチン・ワークのダンス音楽とは、次元が違う彼らの音楽の成果を知る事ができる。三、四重奏の入神の演奏、ハンプトンのヴァイブではなく、ドラムスも素晴らしいとしか言いようがない。

ベニーは、映画関係者ではなかったが、マッカーシズムでのハリウッド 10 の有罪に反対した数少ない音楽家で、非常に勇気のある人道主義者でもあった。



図 12 カーネギー・ホールでの楽団のメンバー (曲に応じメンバーが交代)

ペギー・リーは、41 - 43 年にベニーの楽団に参加。この時期が最も楽団の人気のあった時代である (図 13)。

もちろんジャズは、米国のみのもではなく、世界に広まった。

ペギーは、ジョージ・シアリングとも共演しているが、英国生まれの彼は、生後間もなく失明。47 年に米国に渡り、クール・ジャズの第一人者となり「バードランドの子守唄」などの名曲を残した。メル・トルとの共演でグラミー賞を受賞し、ナイトの称号も授けられている (図 14)。ジャケットは、盲目のジョージの眼鏡に、アルバムのタイトル、バーブラ・ストライサンドの「ある晴れた日に永遠が見える」をかけて、太陽の輝く、晴れた日の青空が映っている。盲目の彼は、永



遠を見た事だろう。

ジャケットのセンスもいいし、盲目の彼の2つのサインも興味深い。きっと、ジャケットの隅を左手で確認しながらサインしたのだろう。



図13 ペギー・リー,41~43年に楽団の歌手

## 〔6〕ライオネルハンプトンの名演中の名演,「スターダスト」

「スターダスト」は、ホーギー・カーマイケル(作詞はマイケル・パリッシュ)が、1929年

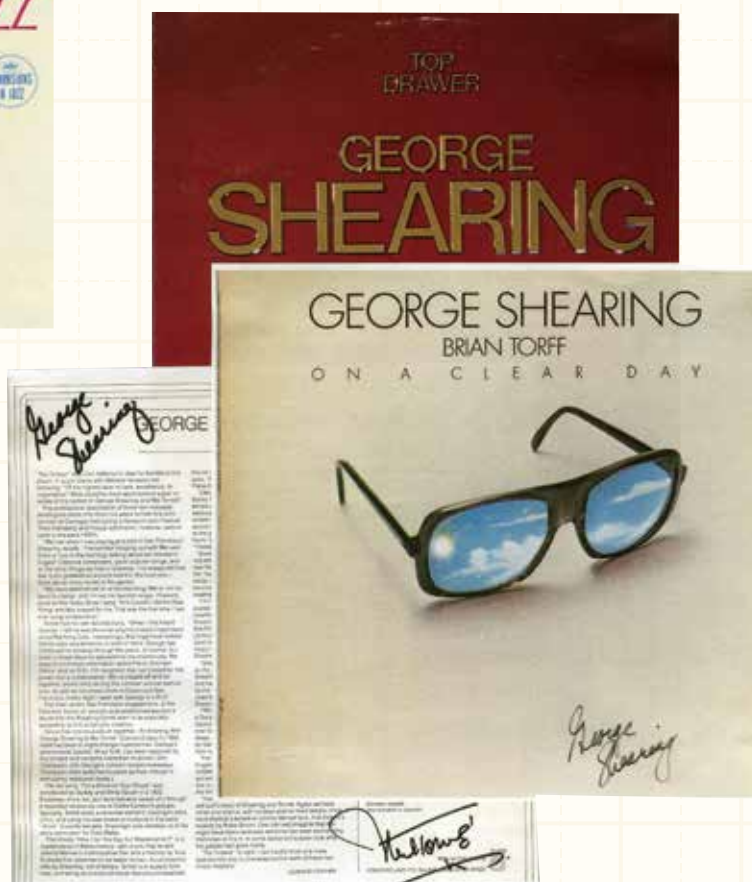


図14 イギリス出身のジャズマン,ジョージ・シアリング

に作曲した名曲である。

ホーギー自身は、①ピアノの弾き語り ②ピアノ・ソロ ③ピアノと歌詞の朗読の3種類の演奏を遺している(図15)。

彼の演奏を聴くと名曲である事は伝わるが、演奏は並である。

然し、この曲をカバーした演奏家は枚挙にいとまがなく、膨大な数にのぼる。

そんな中で最も印象的で感動的な演奏

が、47年8月4日の「Civic Auditorium, Pasadena, Calif.」でのライオネル・ハンプトン・オールスターズの演奏であろう。

このアルバムには名曲4曲が入っているが、ライオネルが演奏しているのは、この「スターダスト」1曲だけである(図16)。ジャズが好きな人も、関心の無い人も、ぜひ聴いてジャズの醍醐味を味わってほしい。解説など必要ない。聴けば分る。

実はこの曲は、39年のベニーのカーネギーのコンサートでも演奏しているが、注目するような演奏ではない。きっと、この日の為に、ライオネルがとっていたのだろう。後年、彼はスターダストを再演している。それなりに良い演奏ではあるが、47年の演奏には遠く及ばない（図17）。

演奏には、時の勢いというものがあり、いつ名演が生まれるか分らない。それも即興性のあるジャズの楽しみだろう。

40年代には、第2次大戦でビッグ・バンド維持が困難となり、演奏技術の向上した少人数のジャズメンが、自分達の楽しみも含め、高度な技術と複雑な即興演奏を競い合う「ビバップ」が誕生。然し、それにも種々の限界がでてきて、「モダン・ジャズ」の時代に移行していく。歴史と共に音楽も変化していく。それがジャズの世界である。

（つづく）



図15 「スター・ダスト」の作曲者、ホーギー・カーマイケル



図16 ライオネル・ハンブトン楽団の「スターダスト,1947」



図17 ライオネル・ハンブトン楽団の「スターダスト,別録音」